

2018 Gold Wing のスタイリングデザイン ーライティングシステムー

Styling Design for 2018 Gold Wing
– Lighting system –

栗 城 大 亮¹
Daisuke KURIKI

要 旨

2018 Gold Wing のライティングシステム (灯火器) のデザインをおこなった。機能と外観の両面から先進性を表現すべく、LED を用いた多眼式ヘッドライトによる表情づくりにチャレンジした。また、Gold Wing のアイデンティティとなっている「ウイングライン」を新たなライティングシステムによって構成し、そのアイデンティティを車体前後に配することで、車体全体のイメージの統一を図った。先進性と伝統を重んじたライティングシステムの実現によって、本 Gold Wing のデザイン開発に大きく寄与した。

ABSTRACT

We created a design for the lighting system of the 2018 Gold Wing motorcycle. To express a sense of innovation in terms of both function and appearance, we attempted to use multiple-eye LED headlights to create a “facial expression” for the motorcycle. In addition, we re-created the “wing line,” the pattern which represents an important part of the brand identity of the Gold Wing, using the new lighting system. We unified the impression given by the overall body of the motorcycle by incorporating the wing line pattern in the designs for both the front and the rear of the body. Our new lighting system design values both innovation and tradition, and it represents a big contribution in the development of the new design of the Gold Wing.

1. はじめに

2018 Gold Wing (Fig. 1) のライティングシステムをデザインするにあたって、新たな個性を打ち出すと同時に、Gold Wingらしさの表現が望まれた。

Gold Wing の顔となるフロントフェアリングには、翼を左右方向に大きく広げるように、ヘッドライトとウインカが配置されている (Fig. 2)。我々は、その形状から「ウイングライン」と名付け、ひとつのデザインアイデンティティとして継承してきた。本開発においても、そのアイデンティティを引継ぎながら、先進性を象徴する技術の導入と、個性ある表情作りが求められた。

また、リヤコンビネーションライトのデザインにおいては、フロント部分が与えるイメージをリヤ部分にも反映するという、統一感の演出に挑んだ。本モデルのスタイリン



The Gold Wing Tour DCT Airbag (2018)

Fig. 1 The 2018 Gold Wing Tour

¹ 二輪 R&D センター



Fig. 2 The Gold Wing in former generations

グテーマ、「Styling with Refined Sharpness and Tension 洗練された鋭さと緊張感」⁽¹⁾を具現化するための、ライティングシステムデザインによるアプローチについて、以下に述べていく。

2. フロントデザイン

Gold Wing は、その時代の先進技術を取り入れたデザインによって先進性を引き立たせ、それぞれの時代を象徴してきたモータサイクルである。また、それがひとつのアイデンティティにもなっている。

そこで、ヘッドライト用光源として二輪車にも普及が始まっている LED を採用し、LED だからこそ実現できる新しいウイングライン、新しいフラッグシップの顔づくりにチャレンジした。

2.1. ヘッドライトデザインのキーコンセプト —ウイングラインの継承と進化—

一般的に採用されている LED 灯火器は、主照明灯にリフレクタタイプを、ポジションライトに導光棒を用いたタイプが多い。しかし、時代の先進技術と呼べる先進性を表現すべく、ヘッドライトには、片側 5 個、両側で計 10 個のレンズを備える多眼式照明法によるロービームを採用した。また、立体的で奥行きのある形と光り方をする導光レンズをトリムラインに採用した。

多眼式ヘッドライトは、二輪車としては世界で初めての採用となる。そのような象徴的キャラクタによって、ライティングシステムのデザインにおいても、Gold Wing の唯一無二の「存在感」を表現したかった (Fig. 3)。

フラッグシップとしての威厳を帯び、信頼がおける風貌を備え、ステイタスを感じさせるとともに、精かな顔つきを表現することを目指した。その実現を考えたとき、表情を形作る上で、ヘッドライトによる「目」の果たす役割は大きかった。

2.2. 二灯式ヘッドライトにおける多眼式 LED による表情づくりの研究

2.2.1. 二灯式ヘッドライトにおける二眼と多眼の印象の違いのスタディ

(1) 二眼の限界 LED が採用される以前は、プロジェクタランプやリフレクタを用いてヘッドライト部の意匠が構成されていた。左右二灯式ヘッドライトの場合、それぞれに瞳を持つ二眼式ヘッドライト (以下、二眼式) となる。灯火器は表情づくりに大変重要で、特に二眼式の場合、人は無意識に「目」として認識する傾向がある⁽²⁾。そのため、光源が瞳の役割となる二眼式の場合は、フロントデザインは動物的な表情になることが多く、新しさを表現するという点では限界を感じていた。

(2) 多眼でのチャレンジ 光源が分散する多眼式で構成した場合、それが二灯式のヘッドライトであっても、核となる瞳部分は存在しなくなる。そのため、動物的な表情というより、無機質的な、あるいは昆虫の複眼的な、今まで見たことのない異質な印象を与えることとなる。そこに



Fig. 3 Wing Line implemented in lighting system design (top: developed design, bottom: previous designs)

新しさを表現することができる可能性を見出し、多眼式でのスタディがはじまった。

あえて、無機質になりがちな多眼式というモチーフを用いながら、意思の感じられる表情にするための考察をおこなった。

(3) 二眼の表情例 ヘッドライトによる表情づくりを検討するにあたり、まずは表情の表現がしやすい二眼式でのスタディから入った。二眼式の瞳の位置や大きさの違い、また、それらとレンズ外形(輪郭)との組合せを変えた意匠例を図に示す(Fig. 4)。

これらの例に示すとおり、単純な要素の組合せによって、威圧感を感じる表情も、やさしく落ち着いた表情も、さまざまに表されることがわかる。

(4) 多眼の表情例 同様の試みを多眼式でおこなった例を示す(Fig. 5)。図からわかるように、多眼式の場合、瞳を感じさせる部分を失うため、表情を表すのが容易ではないことがわかる。

(5) 目の周りの形状による表情の発見 人間や動物の表情が、いったい何によって決定されるのかについて、あらためて考察をおこなった。

Fig. 6に、ライオンとハクトウワシの、目とその周囲の眉にあたる部分や眉間の動きを表す写真を示す。

これら動物の表情を観察すると、やはり目の輪郭と瞳の位置関係は、表情に大きな影響を与えていることがわかる。しかし、その表情を形成しているのは目だけでなく、眉や眉間など、目の周辺要素の形状が重要な役割を果たしていることがわかった。

そこで、本開発のGold Wingの表情づくりは、ヘッド

ライトの表情に加えて、周囲要素の意匠を効果的に活用した、顔全体のデザインで取り組むこととした。

2.2.2. 隈取(くまどり)の活用

前項のスタディより、目の周囲の要素によって表情づくりをおこなう例の一つとして、歌舞伎役者が顔に施す隈取に注目した。

隈取は、顔の筋肉や血管を誇張するために描かれたものと言われ、舞台を遠くから見る人にも、役者の表情が一目見てわかるようにする役割を果たしている(Fig. 7)。



Fig. 6 Examples of facial expressions of animals



Fig. 4 Examples of facial expressions constituted by binocular lighting designs

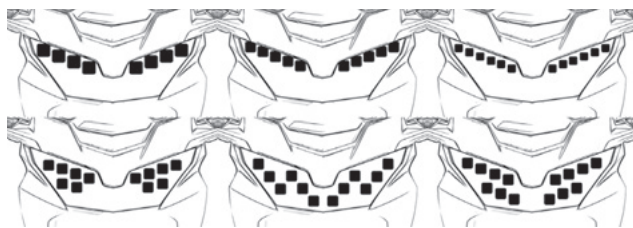


Fig. 5 Examples of expressions constituted by multiple-eye lighting designs



Fig. 7 Kumadori (shadings on face)

隈取を形成しているデザイン要素で重要な役割を果たしているのは、表情を誇張するラインである。この隈取の例に示されるように、瞳そのものではなく、周囲に配置されるラインの構成によって表情を表すことができると考えた。

そこで、ヘッドライトレンズのアウトラインだけではなく、内部の導光レンズによるトリムラインも併せて用い、表情を表すためのラインとして活用することで、フロント部分の表情を形成していった (Fig. 8)。

2.2.3. ハイビームの作り込み

ハイビーム用灯体は、リフレクタタイプを採用した。通常であればリフレクタは、鏡のように周囲を反射するため、明るく目立つ存在となる。

そこでリフレクタを導光レンズの奥に、多眼レンズ下部などの黒いエクステンションを写し込むように配置した。それにより、リフレクタがブラックアウトされ、多眼レンズと導光レンズが強調されるようにした (Fig. 9)。



Fig. 8 Styling design sketches of vehicle front



Fig. 9 Difference in appearance due to difference in structure of reflector

2.2.4. 多眼式 LED ヘッドライト構成パーツへの造り込み
灯体全体のデザインだけではなく、ヘッドライトを構成しているパーツ一つ一つにもこだわりを持って、デザインの造り込みをおこなった (Fig. 10)。

多眼レンズで構成されるロービーム用灯体は、各々のレンズを囲むエクステンションにおいても、立体感のある形状や、シボを入れる範囲など、細部にまでこだわって意匠を施した。

また、光学的に制約の多い導光レンズについては、立体的で奥行きのあるムラのない均一発光を実現し、どの角度から見ても美しい隈取を表現した。

2.3. 二灯多眼式ヘッドライトの完成

片側 5 個、両側で計 10 個のレンズを備える多眼式照明法を用いた、ヘッドライトのデザインが決定した。

左右に振り分けられた多眼式 LED は、灯体の輪郭や、眉間などの周辺形状と導光板による、隈取表現の効果により、精やかな表情をたくわえる「目」となった。

本開発における一連のスタディにより、LED を用いた多眼式ヘッドライトの表情作りに、周辺のラインを活用するという、新しい手法を見出すことができた。

また、導光レンズを用いた隈取は、ウインカーポジションライトとのコンビネーションにより、左右に広がるウイングラインを構成する役割も担っている。そのウイングライン先端部は、極力車両の外側に配置し、他車からの視認性向上にも貢献している (Fig. 11)。

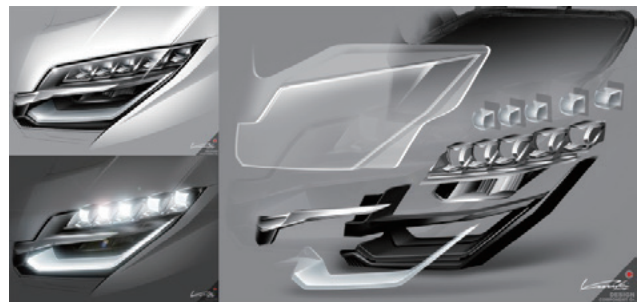


Fig. 10 Drawing showing emitted lights and sketch showing individual components



Fig. 11 Front view of finished design

3. リヤコンビネーションライト

3.1. フロントデザインとの統一性

ヘッドライトによって形成された、ウイングラインのキャラクターを、リヤコンビネーションライトにも採用した。

車両の表情を印象付けるという観点では、リヤの灯体よりもフロントに配置される灯体が注目されがちである。しかし、路上でふと気がついて車両を目にするときに、フロント部分は一瞬で過ぎ去ってしまうのに対し、リヤ部分はその後を追うように、より長い時間観察される。また、車列を成して走行する場合には、後続車から継続して目視され、自然と見られる時間が長くなる。

このように、リヤ部分の表情作りは、車両を印象付ける上で、フロント部分と同様に重要なのである。

本開発の Gold Wing では、リヤコンビネーションライトにもウイングラインをモチーフとしたデザインを施した。それは、前から走って来た Gold Wing が眼前を走り去り、そのうしろ姿となったときの効果を考えたものである。フロント部分で印象付けられたウイングラインの光が、まるで車両を通り抜け、その余韻を眺めているように感じられることをねらった。

このように、車両をずっと目で追いつけたくなるような衝動を起こさせるような、強い印象を残すことのできるリヤコンビネーションライトのデザインを実現したかったのだ (Fig. 12)。

このようなデザインが実現できたのは、左右にパニアケースを持つ、Gold Wing というモデルならではの利点でもある (Fig. 13)。

3.2. 光り方の統一

表情を表すためにヘッドライトで造り込んできた、二灯式多眼や隈取などの要素をリヤコンビネーションライトでも踏襲し、前後で統一された表情を生み出した (Fig. 14)。

また、さらなるデザインの統一感を持たせるために、光り方の形状だけでなく、灯体内部の光学的な構造も、フロントに採用した構造に近いものにした。

ヘッドライトの多眼式ロービームにあたる部分は、リヤではストップランプ部にあたる。リフレクタを分割複数配置し、同様に独立したカットを施したアウトレンズとの組合せで多眼を表現した。

ヘッドライトにおける立体的な導光レンズ部分は、テールランプ部にあたる。リフレクタとインナレンズを組み合わせることで、フロントと同じように立体的で均一な発光を表現した。

ヘッドライトのハイビームにあたる部分は、リヤのウインカ部にあたる。ハイビーム用灯体と同様に、リフレクタタイプを採用している (Fig. 15)。



Fig. 13 Styling sketch of vehicle rear

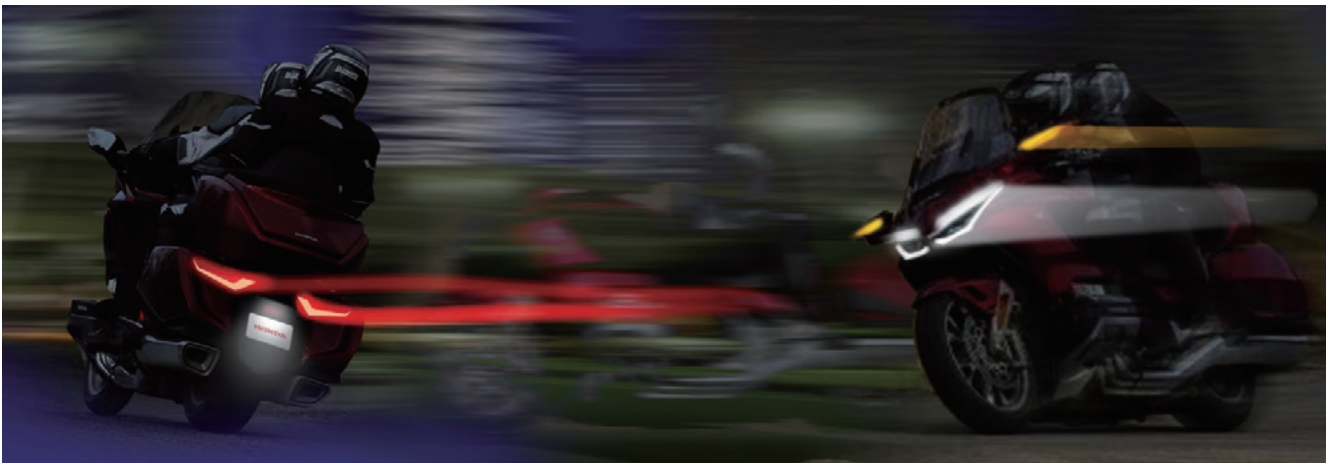


Fig. 12 Expression created by light emissions when vehicle has travelled away



Fig. 14 Unified characteristic impression applied to front and rear lighting systems

3.3. 最終的なリヤデザインの完成

以上に述べたように、リヤ部に対しても、フロント部と同様に特徴的なウイングラインを形作った。それにより、新しい Gold Wing にふさわしい、印象的なテールライトを実現することができた。また、左右へ伸びやかな光を演出することに成功した。光の幅が広がることで、ねらいの一つであった被視認性の向上も実現された (Fig. 16)。



Fig. 15 Sketches of parts constructing combination light



Fig. 16 Rear view of finished design

4. まとめ

2018 Gold Wing にふさわしいライティングシステムをデザインした。その特徴的なデザイン手法を以下に示す。

- (1) LED を用いた多眼式ヘッドライトによる表情作りに向けた、周辺部分のライン作りを活用する新しい手法を創出した。
- (2) ウイングラインをモチーフとした、フロントとリヤの灯体デザインにより、前後で統一された表情を生み出した。

先進技術を用いながら、これまでにない Gold Wing 独自の表情と先進性を表現することができた。アイデンティティとしてのウイングラインも継承し、Honda フラグシップとしてのプレミアム性を生み出すことに貢献した。

参考文献

- (1) 佐藤靖博, 脇田展孝: 2018 Gold Wing のスタイリングデザイン, Honda R&D Technical Review, Vol.31 No.1, p.1-10
- (2) 丸山一幸, 堤陽次郎, 村田裕: 二輪車の発見率を向上させる灯火器配置「FACE」デザインの研究, Honda R&D Technical Review, Vol.21, No.2, p.130-135

■著 者■



栗城大亮